

「問い」の編集工学

第2回

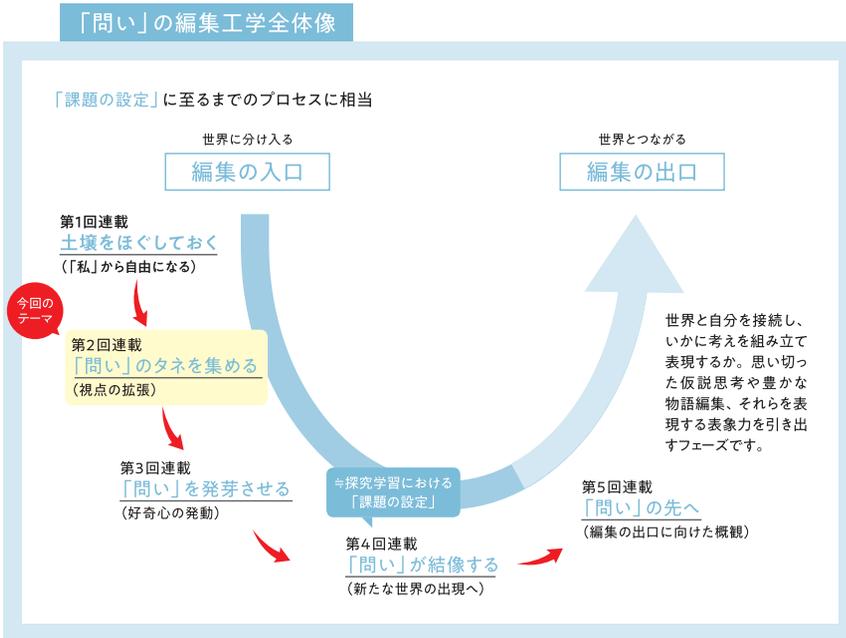
編集工学研究所 安藤昭子

問いのタネを集める — 視点の拡張 —

探究活動からイノベーションまで、世代や領域にかかわらず今問われる「問う力」。「答え方」ではなく「問い方」を鍛錬するにはどうすればいいのか。今回は、問う力を引き出す土壌づくりのため、「たくさんの私」について思考を巡らせました。第2回となる今回は、「問い」のタネを集めていく独自の方法について、お話しいただきます。

物事には「たくさんの顔つき」がある

世界と自分を接続し、いかに考えを組み立て表現するか。思い切った仮説思考や豊かな物語編集、それらを表現する表象力を引き出すフェーズです。



今回は、思いがけない自分に出会う「たくさんの私」の演習をご紹介します。「整合性のとれた「種類の私」という幻想から脱して、「柔らかな私」をのびのびとさせ、問いが自在に発芽できるような土壌をつくる作業でした。今回はそうした「たくさんの私」を取り囲む、「情報の多面性」に目を向けてみましょう。

ここでいう「情報」とは、デジタルデータなどの狭義の情報に限られません。部屋の気温や今朝の体調、信号が変わるタイミングや道行く人々の服装、友達ふとした表情から今日のお弁当の中身まで。私たちは常にありとあらゆる「情報」に囲まれていて、日々それらを「編集」しながら生きています。

例えば「お弁当」とひと言でいっても、見る角度によってその顔つきはさまざまです。我が家のことを思ってみれば、高校生の娘にとつてお弁当は空きつ腹を満たす昼食ですが、作る親からすれば献立に頭を悩ます毎朝のお題です。空っぽになったお弁当箱は「おいしかった」という情報となり、好物を詰めれば「がんばれ」のメッセージにもなる。忙しい親子のコミュニケーションの媒体でもありました。

情報の「地」と「図」

このように、私たちを取り囲む情報には常に複数の側面があります。こうした情報の多面性を意図的に見られるようになる、自然と問いのタネが集まり始めます。そのからくりは後ほどお話しするとして、ではこの情報の多面性は、どうすれば見えてくるのでしょうか。

不思議な錯覚アートを数多く残したオランダの画家M・C・エッシャーに「空と水I(※)」という作品があります。魚の隊列がいつのまにか白黒反転して鳥の隊列になっている、有名な錯視絵の版画作品です。これは「地模様」の上に「図柄」

を読み取る視覚認識の特性を使ったトリックで、見る側にこの「地」と「図」の反転をおこして、「一気に景色を変えてみせる」ものです。

こうした「地」と「図」の反転は、視覚情報に限らず物事を認識するあらゆる場面で起こります。苦手と想っていた人が、ふと親しく見えてくる。これも何かの拍子に地と図の反転が起こったのかもしれない。私たちは常に「地」(ground)となる情報の上で「図」(figure)としての情報を認識しています。情報の分母と分子といってもいいし、文脈と意味といってもいい。先ほどのお弁当も、娘を「地」とするか母を「地」とするかで「図」として表れる情報(昼食かお題か)が違ってきます。情報の多面性とはつまり、さまざまな文脈(地)の上に展開される、たくさんの意味(図)のバリエーションです。複雑に絡まり合う情報の「地」と「図」を意図的に動かしていくことで、狭く固まっていた視点が柔らかく広がっていきます。

※「空と水I」で画像検索すると見られます。ぜひご覧になりながら、お読みください。



安藤 昭子

あんどう・あきこ ● 編集工学研究所・専務取締役。出版社で書籍編集や事業開発に従事した後、2010年に編集工学研究所に入社。企業の人材開発や理念・ビジョン設計、教育プログラム開発や大学図書館改編など、多領域にわたる課題解決や価値創造の方法を「編集工学」を用いて開発・支援している。2020年には「編集工学」に基づく読書メソッド「探究型読書」を開発し、企業や学校に展開中。著書に、『才能をひらく編集工学』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）、『探究型読書』（クロスメディア・パブリッシング）など。

助詞ひとつで世界が変わる

ただこの「地と図」というもの、漠然と思うだけではそうそう簡単に動くものはありません。ここでは、「地と図」の転換を起すちょっとしたおまじないをご紹介します。「見方を変える編集術」です。

「地と図」の転換① 主体と場所を変えてみる

「〜にとって」「〜における」「〜をさ」まざまに入れ替えながら、「誰」にとってか、「どこ」にあるのか、といった視点を動かしてみます。冷凍食品メーカーからすれば「お弁当」は市場ですし、「オベンタグラマー」にとっては自己表現の作品群です。学校においては、カバンにあるときは生徒の持ち物であり、お弁当の時間となればコロナウイルス感染対策の対象となります。このように、情報に関わる主体と場所を切り替えてみると、それまで見えていなかった視点が開けます。

「地と図」の転換② 助詞を変えてみる

言葉の力を使って見える景色を変えてみる方法もあります。「お弁当」という言葉に「に」を、で、の、と、も」などの助詞を切り替えながらつけてみます。「お弁当に」と言えば、何を詰めるかが連想されますし、「お弁当と」と言えば、一緒に持つていくお箸や水筒が思い浮かびます。「お弁当の」「お弁当で」「お弁当を」などなど、試してみるとクルクルと景色が変わることを感じられるでしょう。

試みに「マグカップ」を例にして、「〜における」と「地」を入れ替えてみましょう。「飲み物を入れる器」以外の顔つきが見えてきませんか？



「お弁当」や「マグカップ」はいたってわかりやすい例ですが、「ここに」「受験」や「文化祭」といったイベントを置いてみると、関係する人々のさまざまな理屈も願ひも見えてきますし、「進化」や「勝利」といった概念についても、地と図を動かしながら多面的に考えてみる事ができます。情報は常に関係性の中で「乗り換え・着替え・持ち替え」を起こして、ひとつの意味のままじつとしていくことはありません。

「どう見るか」を自分で選ぶ

こうした方法によって、身の回りにあるものの「地」を意図的に切り替えながら、今まで意識していなかった側面を見るよう努めてみます。これを応用すると、ニュースで見えるような社会問題にもさまざまな見方があることに気がついていきます。各国の思惑が交差する国際秩序の緊張状態も、何を「地」として「図」を捉えるかで、見える景色が変わってきます。腰を据えて考えるためにはそれなりの学習も情報収集も必要になります。それに先立つてまず大事なことは「今見えている情報がたった一つの真理ではない」という見方に立つてみる事です。メディアが伝える情報は、少なからず何らかの「地」(立場)によっています。「他の「地」で見るとどんな「図」(何)が見えてくるのか」というベーシックな問いを常に抱えておくこと、そして自分で考えるための「地」はいつでも自分で選んでいいのだということ、その方法とともに理解

しておくことが大切でしょう。

「問い」は矛盾から生まれてくる

こうしてたくさん視点を獲得していくと、その間に必ずやズレや矛盾が生じてきます。立場変われば見方も変わる。異なる見方の間に生じる「わかりあえないさ」は、時に居心地の悪さにも、場合によってはストレスにもなるかもしれません。けれど、こうしたズレや矛盾の中にこそ、現状を動かさうとする問いのタネが隠れているのです。

いつもの自分の感覚では理解できないこと、当たり前前と思っている風景には入ってこないことの中に、まだ見ぬ「見方の可能性」があります。「たくさん私の私」を自由に、「情報の多面性」に注目していると、ふと湧き出す違和感や疑問、考えてもみなかった不思議や謎など、情報の奥や裏側に蠢く問いのタネに敏感になっていきます。そうしたセンサーにしたがって、いつもとは違う角度から物事を捉えてみましょう。「そういうもの」と思い込んでいた風景にたくさん顔つきがあることを、さっと面白く感じるでしょう。

世紀の発見も、社会のパラダイムシフトも、個人的な新しい好奇心も、そうした日常の隙間に起こっていきます。

本連載のバックナンバーはこちらからご覧いただけます

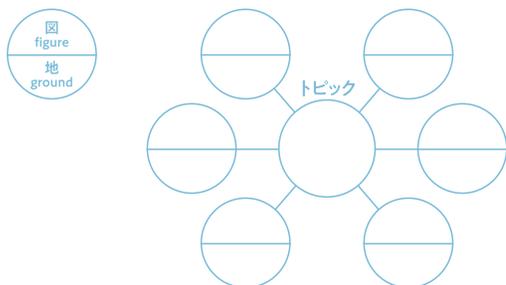
← 続きます

【「問い」のタネを集める演習シート】

①情報の「地と図」を動かす

考えてみたい事柄(トピック)の「地と図」を動かして、「たくさん顔つき」を引き出そう。

1) 「地」となる主体と場所を変えてみる [~における、~としての]



2) 助詞を変えて連想してみる [に、を、で、の、と、も……等]

トピック

○

に、
を、
で、
の、
と、
も、

②情報を多様に言い換える

「たくさん顔つき」をヒントに、トピックをできるだけたくさん言い換えよう。「○○とはつまり…とも言える」と考えてみるといいでしょう。

○○とはつまり、

●

●

●

●

●

●

●

●

●

トピックにまつわる疑問や違和感、更に考えてみたいことを書き出します。

●

●

●

●

●

Q 演習のヒント

任意の事柄(ここでは「トピック」と呼びます)を真ん中に置いて、さまざまな「地」を置きながら「図」を書き出します。あわせて助詞を切り替えながら連想を広げます。トピックについて「たくさん顔つき」が見えてきたら、なるべくたくさん「言い換え」をします。以上のプロセスから、疑問や違和感を取り出しておきましょう。これが、問いのタネになります。

「地と図」の転換を体感する3冊

見方がクルリと変わる、三者三様の地と図の転換。ワケルとワカル、ワカルとカワル。情報の「たくさん顔つき」を感じてみよう。



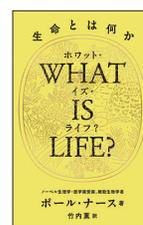
『世界を、こんなふうに見てごらん』
日高敏隆(集英社)

芋虫には何がどう見えている？ 昆虫や動物の目になって見つめる世界は、驚きと不思議でいっぱい。自然といきものを見つめ続けた動物行動学者の日高センセイが、「世界を、こんなふうに見てごらん」と語りかけ、「自分だけのなぜ」をもとと背中を押してくれる。人間が見ている世界だけが世界ではない。いきものとしてのおおなる「地」の転換に誘われよう。



『錯視芸術:遠近法と視覚の科学』
フィーブ・マクノートン(著)／駒田 曜(訳)(創元社)

平面の絵に奥行きを感じたり、ありえない構図がありふれた風景にしか見えなかったり。人間の知覚はかくも騙されやすい。「描かれたもの」と「見ているつもりのも」のズレを認識したときに、頭の中に潜む「先入観」にはたと気がつく。御来迎のようなブロッケン現象から地と図のマジックまで、遠近法とだまし絵を通して、知覚を支える「地」の危うさを思い知る。



『WHAT IS LIFE? 生命とは何か』
ポール・ナース(著)／竹内 薫(訳)(ダイヤモンド社)

「生命とは何か」。人類の永遠の問いに「生物学の5つの重要な考え方を重ねると、何が見えてくるだろう。「細胞」「遺伝子」「自然淘汰による進化」「化学としての生命」「情報としての生命」——見方の「地」を切り替えながら「生きている」ということ不思議に迫る。複雑な生命の「意味」を果敢に展望する、ノーベル賞生物学者ポール・ナースの処女作。